

「手」で紡ぐ言葉の世界



森口さんは、勉強会の受講者に向かって手話を覚えるポイントを語る（奈良教務支庁で）

森

口悦子（58歳・片塩分教会長夫人・奈良県大和高田市）が初めて手話と出会ったのは、36年前のある日。教友に誘われ、地元の手話サークルへ足を運んだのがきっかけだった。その日の出来事を、森口は述懐する。

「障害がありながらも、明るく生き生きとしたろう者の方々のパワーに驚いた。皆さん温かく受け入れ、優しく話しかけてくれて。探し求めていたものに巡り合えたような気がした」

以来、森口は無我夢中で手話を学んだ。週のうち半分は、県内の手話サークルを訪ね、ろう者同士の会話に加わっては、見よう見まねで手を動かした。そんな中で世話になった、忘れられない「恩師」がいる。

聴覚障害と小児まひの身上を抱えるその男性は、突然「天理教の教えを知りたい」と自教会を訪ねてきた。それからというもの、杖を突き、電車とバスを乗り継いで教会へ参拝にやって来ては、おてふりや鳴物を学ぶようになった。

ところが、その数年後に男性は胃がんを患い、37歳という若さで出直す。「教えに真摯しんしに向き合うその方の姿から、ようぼくとして大切なことをたくさん教わった」

森口は、男性とある約束を交わしていた。それは「いつか、教会で手話教室を開く」というものだった。

時を経て昨年7月、森口は仲間と共に、天理市内の奈良教務支庁で「手話勉強会」を開催した。自身が主催するのは初めてだった。それは、男性との約束をなんらかの形で果たすため。また、耳の不自由な人をおちばへ案内する、お道の手話通訳者を一人でも多く育てるためでもあった。

勉強会は月1回。森口が担当する上級クラスでは現在、教祖のひながたやお言葉を、手話で表すうえでの大切なポイントについて話し合っている。

「音のない世界、へお道の心を広めたい」と語る森口には、一つの夢がある。「社会とのつながりを持ちにくく、孤独を感じやすい高齢のろう者の方々に手を差し伸べ、共に心から笑顔で語り合える場をつくりたい」

夢を形に——。今日も、手話を通して「絆の輪」を広げていく森口の姿がある。